

---

# 秋桜の花

健史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秋桜の花

### 【Zコード】

N4511D

### 【作者名】

健史

### 【あらすじ】

雄太は高校3年の時に母親をなくし卒業後、東京のカメラの専門学校へ通う為一人暮らしを始める。東京での生活の中で恋愛・友情・そして知られざる過去が・・・あたたかなラブストリーです

深夜の11時をまわっていた頃だったと思つ。

電話が鳴り僕は受話器を取つた。

「もしもし。」

「成瀬さんのお宅で宜しいですか？」

「はい。そうですが」

受話器を通して相手の男は淡々と話す、その内容はこんな事だ。

電話を掛けたのは、東京の警察からで、母親が事故に遭い病院へ運ばれたのだが、即死だったと言つ事と、母親の引取りと遺品の確認の電話だった。

僕は朝一番の新幹線に乗り、母親の居る病院へ向かつた。

僕の家は母子家庭で小学校に入学して暫くしてから父親は癌で亡くなつた。

母親は一人で僕を高校3年生になるまで育ってくれた。

しかし、その母親もこの世界から居なくなり、僕一人になつた事

になる。

東京の病院に着いた僕は、警察の人には案内をしてもらい、魂が抜けて、肉体だけの残った母親に会う事になった。

本当なら、凄く悲しくなり涙が溢れるのだけど、そんな事も忘れてしまう事実をめのあたりにするのだ。

そもそも母親が東京に行っていた事も僕は知らなかつたのだけど、それよりも、母親が一人で死んだのではなく、

隣にもう一人母親と同年代の男が同じように死んでいた。

警察の人は事故に遭つた時二人は一緒に車に乗つていて男が僕の母親を庇う様にして死んでいたと言つていた。

事故の経緯はこうだ、一人は首都高速中央環状線で走行中渋谷区の辺りでかなりのスピードを出していた為ハンドルのミスで横転してしまつたらしい、辺りは車も疎らでたまたま、別の車両との追突はなかつたと言つていた。

なぜ母親がそんな時間に、この男性といったのかは分からぬけど何となく二人の関係が友達とかそんな関係ではなくもつと別な関係だつたのだと思つた。

警察に、遺品の確認をと言われ、僕は別の部屋へと移動した。

母親の遺品と言わされて受け取つた物は、高価なネックレスや、ブランド物のバックだつた。

今まで少し不思議だと感じていた事はある、女手一つで育てくれた母は、生活の事では余り愚痴をこぼした事が無い。

それどころか、周りの友達と同じようにそれなりに僕に買い与えてくれていたからだ。

本当なら家計のやりくりでもっと大変なはずだと思うのだけど、僕自身余り気に留めていなかつたので今思うと不思議な事だと思う。

遺品を受け取った後、暫くその部屋に居ると、知らない僕と同じ年くらいの女の子が入ってきた。

その子は泣き止んだばかりだったのか少し瞳が赤くなつていて、時々鼻を啜つたよつた音をさせていた。

多分母親の隣に居た男の娘だろうと僕は思い何となくこの場に居にくくなり部屋を出る事にした。

色々な手続きや書類を書き終えた僕は、病院から家に帰る事にした。

その途中廊下ですれ違つた看護婦の話が僕の耳に飛び込んできて、多分母親と男の話だらう不倫がどうのとか言つ話をしていた。

母親の死体は、直接葬儀場の方に行く事になつていたので、僕はそのまま自分の自宅へ帰る事にした。

元々親戚が少ないので、そんな集まらず小さな葬儀になつたが、少なからず何人かの人たちは別れを惜しんでくれていた。

母親の葬儀も無事終わり、僕は少しの間、母親の親つまり爺ちゃんと婆ちゃんの家から学校に通う事になった。

僕の住んでた町からそれ程離れてはいなかつた為、学校も電車で通う事になつたが、前より少し時間が掛かるくらいでそれ程気にならなかつた。

そして無事に高校を卒業する事ができた。

## 2

あれから1年たつた、現在の僕はと言うと東京のカメラの専門学校に通つている。

生まれ育つた故郷を離れ一人暮らしをしながら、学校に通うことにして。

祖母からの仕送りと週3～4回ほどコンビニでアルバイトこれで僕は毎月の生活を送つてている。

僕はカメラに興味を持つていて、中学校に入学する時、お祝いに母親に買つてもらつた、一眼レフのカメラをずっと愛用していたのだ。

一人で出掛けた風景や花とか夜景の撮影をして家で現像までこなしていくその頃から密かに将来はカメラで食べていけたら何て夢を持っていた。

趣味で始めたカメラの撮影も今では、カメラの奥の深い魅力に取り付かれた一人だ。

写真科の2年制度の学校に入学した僕は、学校での授業も楽しくそれなりに学生生活を送っている。

友達も数人ほどだけど、気の合う仲間がいる。

その仲間の中の一人吉田和夫彼は、合コンが大好きらしくこの学生生活の大半を遊んで暮らしているような奴だ。

体はガツチリしていて身長も180cm位あり髪型は短髪で茶色、顔は普通と言つたところだ。

彼は元々この町が地元らしく昔からの友達と夜の街へと毎週のように繰り出しているらしい。

僕はと詰つと昔からそういう事には余り積極的になれず、誘われても断つていた。

女性に興味がない訳では無いけど、多分一般的に言つ奥手だからだろう。

しかし、和夫に突然頼まれる事になる。

「雄太。今日の夜暇だよな?」 成瀬雄太僕の名前だ。

「今日の夜?別に予定はないけど。」

今日はバイトも入つていなかつたし、普段から他に用事と言つものはない。

「じゃあまりなー新宿駅の東口に19時に待ち合わせで」と言つも

て軽く右手を振つて歩いて行つた。

確かに予定はないとは言つたけど、行くとか行かないとか言う前に話が済んでしまい僕は仕方なく待ち合わせをした場所に行く事になつた。

19時より少し前に駅に着いた僕は、和夫が来るのを待つ事にした。

新宿駅は色々な人たちで賑わいを見せていた。

仕事の帰りのサラリーマンや〇〇、学生らしき人も多数・・・

その人の流れを僕は知らずに田で追つてしまつていた。

すると、後ろから僕の肩を軽く叩き、

「待たせたな。」と和夫が言つてきた。

僕が振り返ると、和夫ともう一人地元の友達らしき人が居た。

「こいつ俺のダチの慎也って言つんだ。」と和夫が紹介すると、

慎也が「よろしく〜」と軽めに挨拶をしてきた。

僕は「うん。よろしく」と言い返す。

慎也は、ラインストーンとラメでアレンジしたTシャツにブルーのデニムといったおしゃれな服を着ていて一般的にいうイケメンだ。

彼もまた身長が高くモデルにでもなれそうな奴だった。

ハツキリ言つて僕とは全く別の人種のようだと思える。

一人連れられて僕は洋風の居酒屋に入る事になった。

居酒屋に入ると和夫が店員にあらかじめ予約をしていたのだろう、席に案内されそこに座る事になった。

「なんだよ、まだ来てないじゃん。」和夫は近くにあつた灰皿を自分の所に寄せて、タバコに火を点けた。

「誰かと待ち合わせでも、してるの？」と僕が聞くと

「合図ひとつ言わなかつた？」と前もつて言つていたかのように答えた。

何となく察しはついていたけれど僕は余りそういう場は好きではない少し不機嫌な顔をすると、

「突然決つて他に空いてる奴いなかつたんだよ。先に言つとお前断るから・・・ごめん」と言つて両手を合わせて誤つてきた。

確かにその通りだ、しかし今更帰るわけにもいかず僕は仕方なく承諾することになった。

暫くして3人の女の子が僕達の席に向かつて歩いて來た。

「こんばんは、待たせちゃいました？」

「口ニコと笑顔で話しかけてきたのが佐々木梓、今回コンの話を持ちかけてきた女の子のようだ。

彼女は少し茶色のかかつたセミロングにくるりとカールをかけた髪型で花柄のブラウスにデニムといった格好をしていて、キリッとした顔立ちのどちらかと言つと美人で色白の大人びた女性だ。

和夫と慎也は何度か会つているような口ぶりで、

「待つたよ。すかしらうたと思つたぜ。」と言つて親しげに話をしている。

「始めまして。」と言つて他の2人も椅子に腰掛けてきた。

僕はどうしていいのか分からなくなり、和夫の方に手をやつた。

和夫はそれに気がつき、まずは飲み物決めようぜと言つて僕の方と彼女達にスツとメニューを差し出す。

僕はアルコールは余り飲める方じやないのだけど、こんな時くらいはと思い梅酒ソーダーを頼んだ。

そして、それぞれに飲み物が届いた後、慎也が乾杯の音頭をとり合コンが始まった。

まず最初は和夫が女の子達に僕と慎也を紹介してその後、梓が2人の友達の紹介する。

2人の名前は沙織と有紀と言つていた。

僕からテーブル挟んで正面が梓左に有紀そして沙織の順番に座つていた。

因みに僕の隣は和夫そして慎也だ。

彼女達はみんな同じ短大に通つてゐるらしい。

僕はどんな話をして良いのか分からず和夫と慎也が彼女達と話をしているのを聞いてゐるしかなかつた。

そこへ梓が僕に話しかけてきた。

「余り話さないよね？」

「え？ うん。」と言つて言葉を詰まらせた。

すると横から和夫が「雄太は合コンとか苦手なんだよ。誘つても断るし今回が始めてなんだぜ。珍しくねえ？」

「え、そうなの？」と言つて梓は僕を見た。

確かに珍しい事なんだと思う、大抵は高校時代からみんな普通にしている事だと思つけど僕にはそんな経験もない。

「うん。 どうも苦手で・・・」と言つて苦笑いをしてしまつた。

僕は時々会話に入つてゐるふつに見せながらも、周りの僕達以外の店に居る人を見ていた。

大きな声で笑って楽しんでいる人、サラリーマンの上司と部下の会社の愚痴だろう人間観察の方が僕は合コンより魅力的だった。

合コンが始まってから、数時間程過ぎて、

僕はお酒がほとんど進まず始めに頬んだ梅酒ソーダーの後にジントニックを追加したけど、余り減らずに残っている。

周りのみんなは、結構な量を飲んでいる風でテンションはかなり上がっていた。

「！」の後、何処行こうか！ 慎也が楽しそうに声を張り上げて言つ。

「カラオケ行こう！ カラオケ！」 有紀がそれに続いて言つ。

時間は10時を少し過ぎたくらいだ。

精算を済ました後、店を出た僕達は外で少し立ち話をしていた。

その間に和夫と慎也は有紀と沙織のメールアドレスと番号を聞いているみたいだった。

僕はそんな気になれずにそのやり取りを見ているだけだ。

その後、悪い気はしたのだけどみんなに謝つてから僕だけ帰る事にした。

家に着いて時計を確認した頃には11時30分になっていた。

僕は軽くシャワーを浴びてから、数週間前に撮影した写真の現像

に取り掛かる事にした。

僕の家は2DKで6畳の部屋と4畳の部屋がある、その4畳の部屋を少し改造して暗室にしている。

カラーの現像は温度調整や機材の値段を考えると諦めるしかなく、白黒現像だけ自分でやる事にしている。

僕はまだフィルムの現像をやっていなかつた為、ステンレストランクにフィルムを巻きつける所から始める。

その後、現像液と定着液をメスカップに移し温度調整をおこなうなど全ての工程が終わりフィルムにクリップを取り付け乾燥するのを待つ事にしたのだが、時間は1時を過ぎていたので今日のところは寝る事にした。

4

次の日に学校に着いた僕は、席につき教室の窓から空を眺めていた。

空はぐずついた天候で今にも雨が降りそうだしそうだった。

そこへ和夫が僕に声をかけてきた。

「おはよう。昨日は悪かったな。」少し申し訳なさそうに言つてきた。

「うん。おはよう。先に帰つたりしてごめん。」かえつて僕のほう  
が先に帰つてしまつたのだから誤らなくてはならないと思つていた。

「いいよ。俺が誘つたんだし、雄太がいなかつたら人数足りなかつ  
たから助かつたよ。」

和夫は強引な所もあるけど、結構気を使つてくれるいい奴だ。

「カラオケ行つた後、梓にお前の連絡先聞かれたから教えといたぜ。」

「ん？僕の？」

「おう。お前のだよ。」

「何で？」

「何でって知るかよ。聞かれたから教えただけだよ。案外お前の事  
気にいつたのかもよ。」

和夫はそう言つて僕の顔を見てニヤツとした後、自分の席に戻つ  
て行つた。

そんな筈はないと思う何故なら昨日彼女と何の話をした？と聞か  
れたら一言二言話した。

としか言えないし、

どんな子だつたと聞かれても（？）のマークしかでこない訳で・

・

彼女が僕の連絡先を聞いてきたのも不思議な事だと思つ。

[写真とCGを融合した]デジタル画像処理の学習を終えて帰る頃には雨が降っていた。

もうすぐ、梅雨の時期を迎えるとしている。

こんな時期に傘を持たずに登校しているのは僕の他に少なからず数名はいただろう、

足早に駅に向かう事にした僕は、頭にバックを乗せて学校を後にした。

駅の改札口に着き駅員に定期を見せホームに向かう途中、携帯電話に1件メールが届いた。

「ここにちは梓です。昨日の合コン楽しかったね。カラオケ一緒に行けなくて残念。和夫君にメルアド教えてもらつたので送りました。返信待つてま～す。」

「・・・・・」

僕はメールを確認した後送り返すべきか迷つたがとりあえずそのままポケットに携帯を戻す事にした。

家に帰つてから返信すればいい・・・・・そつ思ひ事にした。

家の近くのコンビニに寄つたあと部屋に戻つた僕は、昨日乾燥さ

せておいたファイルムに田を透していった。

明日は学校は休みだ思いつき暗室にこもる事ができる。

僕は引き伸ばしと印画紙に焼き込みの作業に入ろうとしていた。

材料と薬品の準備に取り掛からつと思つた時に携帯が鳴つた。

僕は携帯のディスプレイに表示されている番号を確認する。

知らない番号だ。

「しまった～。」メールの返信をしていなくて既に2時間近く経つていた。

すっかり眞に夢中になつていて忘れていたのだ。

「もしもし。」

「あー雄太君ですか？」

「うん。」

「梓です。分かります？」

「うん。分かります。」

電話越しから雨と車の走つている音が微かに聞こえてくる、彼女は外にいるようだ。

「和夫君に連絡先を勝手に聞こちやつたから怒つてゐるのかと思つて。  
・・・」

「いえ。怒つてなんかいなによ。」

「本当[レ]?」

「うん。」

まさか現像に夢中で忘れてましたとは言えない。

「よかつた。」彼女は少しホッとしたようだ。

「雄太君は今何してゐの?」

「え? いま・・・[写]真を現像しようかと。」

「[写]真?」

「うん。[写]真だよ、少し前に撮りに行つた時の景色の[写]真を現像し  
ようと思つて」

「へへ見てみたいな?」

「そうだね。機会があれば。」

「あー、「めんね。友達と約束してて來たみたいだから。また、連絡  
していい?」

「うん。」

そして、僕は電話を切ったあとまさか電話が掛かってくるとは思わなかつたので少し驚いていた。

そして暫く経つてから写真の現像に取り掛かる事にした。

5

あれから数日ほど過ぎた。

完全に梅雨の時期を迎えて何日か雨が降り続けている。

学校の校庭の花壇にはあじさいの花が植えてあり綺麗な花を咲かせていて雨の雫がキラキラと光っている。

午前フォットテクニックの授業<sup>カスケード</sup>が終わり午後はフリーになつた僕と和夫は学校の近くにある喫茶店で食事をすることにした。

こここの喫茶店は、僕ら学生が昼食に好く訪れる場所だ。

学校から近いのと、値段が安くボリュームもあり漫画や雑誌もたくさん棚に並んでいていわゆる溜まり場になつていた。

カレーライスを注文した僕は読み途中だった、漫画の本を手に取り読み始める。

和夫はナポリタンを注文してから携帯電話で誰かとメールをしているようだ。

暫くして和夫が話しかけてきた。

「雄太。 梓と連絡取り合つてるの？」

「ん？ いや。 一度メールと電話はきたけどその後はないけど」

「ふうん。 そうか」

「何で？」

「別に深い意味はないよ。 ただどうなのかなと・・・」

「どうつて？ 別に何もないんじやない。」

僕の返事が可笑しかったのか、和夫はおまえなって感じで少し苦笑いをしていた。

注文したカレーライスとナポリタンが僕達のテーブルにきてそれを食べ終わり、

僕はコンビニのバイトがあるのでここで和夫と別れる事にした。

帰り道傘を差しながらコンビニに向かう途中カメラ屋により足りなくなつたフィルムと漂白液それらの材料を買い終わり、コンビニへと向かう。

コンビニのバイトは出勤する時間はまばらで、授業が早く終わつた時にはなるべく早い時間に入るようにしている。

終わる時間は10時と決っているので、長く働く時にはそのようしているのだ。

元々アルバイトも人数が足りていないのでオーナーもひりよくOKしてくれた。

バイトが終わり家に帰ってきた僕は、コンビニで貰った廃棄の弁当を食べながらテレビを見ていて、

ふと携帯の方に目をやると着信があったらしくランプが点滅しているのに気が付いた。

携帯を確認すると、梓からの着信だった。

時間を確認すると8時くらいに連絡をくれたらしく・・・

今は既に11時近くになつてるので、僕はメールを送る事にした。

「今日はバイトで終わったのが10時だったので気付かなくてごめんね。また、メールします。」

送信・・・

その後暫く待つてみたが返信がないので寝る事にした。

次の日、学校の帰りに梓から電話がきた。

「もしもし~し。雄太君ですか。」

「うん。昨日は連絡くれたの」「ごめん。」

「ひひん。バイトって知らなかつたから電話しちゃつてごめんね。」

「雄太君は今何処にいるの?」

「僕は学校の帰り途中だよ。」

「今から予定とかある?」

「別にないけど・・・」

「じゃ〜これから会わない? いま友達と一緒に食事する所なの。」

「え? いいけど・・・友達と一緒にこのいいの?」

「うん。 いま雄太君誘つてみようつて話しつしてたところなの。」

梓に誘われて僕は2人のいるお店に向かう事にした。

待ち合わせた店は真っ白な外壁に緑色の扉左の窓の下には花壇があり何種類かの花が植えてあるお洒落なイタリアンレストランだった。

僕は扉を開き店内に入る。

「いらっしゃいませ。お一人様でよろしいですか?」

近くに居たウエイトレスの女の子が声をかけてきた。

「いえ。待ち合わせをしてます。」

答えながら店内を見ると、梓が気付いていたらしく手を振つている。

僕は梓の居る席に向かつた。

6

梓のいる席に座つた僕は、店内を見渡した。

建物の不陰氣とまた違つて部屋の中はアンティークな造りになつてゐる。

壁から床は全部が木で作られ壁には大きな古い振り子時計があり天井からはモダンなブリキシェード吊灯が各テーブルに優しく照らしていてテーブルクロスは全席黄色で統一されている。

「凄くお洒落なお店だね？」

「でしょ～。ここ私達のお氣に入りなの。」

彼女は嬉しそうに少し笑いながら言つてその後こうづけた。

「雄太君。私の親友の弥生ちゃん

僕は紹介された梓の親友の方を見た。

「ほんにちは。梓から少しだけ話し聞いてました。石川弥生ってい  
ます。」

「ほんにちは。成瀬雄太です」

とても丁寧に話す子だったので僕は少し驚いてしまった。

梓とまた違つたハツキリとした顔立ちに何処か幼さが残つていて  
感じで髪型は真っ黒なストレートにスラリとした体型の綺麗な子だ  
った。

僕はそんな彼女に見とれてしまい、胸の辺りの鼓動が少し早くな  
るのが分かつた。

すると梓が僕の顔を覗き込むように言つてきた。

「雄太君もしかしていま弥生ちゃんにみとれてた？」

「へ？ べべつにみとれてないよ」

そういうながら僕の鼓動はほんと卑くなり顔は赤面していくに違  
いは無い。

「本当かな～？」と言しながら少しからかつたように笑つてゐる。

「違うよ。」

僕は「ううううのが精一杯だったけど、何とか平常心を取り戻そ  
とがんばっていた。

3人で暫く話をした後メニューを取り注文をする事にした。

僕は2人の勧めで、マルゲリータピzzaを注文した。

「このピzzaはトマトソースとモzzaレラチーズが美味しい  
らしくおすすめだと言っていた。

梓はシチリア（トラパニ）風アーモンドトマトソースのパスタで  
弥生はナポリ名物 アサリのパスタを注文した。

そして注文した料理が来るまで僕達は会話を楽しんだ。

会話の途中で梓がこんな事を言つていた。

もう直ぐ夏休みだ、和夫からの提案で休みの間に伊豆に泊まりで  
遊びに行こうという計画だった。

昨日和夫からメールが届いたらしい。

「雄太君も行くよね？」と梓に聞かれたので、僕は少し悩んでいる  
と、弥生にみんなで行つた方が楽しいよと言つてきたので僕は行く  
事に決めた。

その後梓が「私が誘つた時は悩んでたのに凄い違ひね」と少し不  
機嫌そうに言つていた。

注文した料理を食べ終えた僕達は精算をして店を出て帰る事にし  
た。

帰りの方角が弥生と途中まで一緒にいることもあって梓と別れた

あと一人で話しながら帰る事になった。

梓も一般的に言つてかなり可愛いのだが、弥生も引けをとらないぐらじにといづより更に可愛い女性だ。

一緒に歩いている間に何人かの男は彼女をめで追つている。その隣に僕・・・・周りの人達はどう思うのだろう。

僕だったら、あんな綺麗な子にあれなんて思つてしまふかもしない・・・

しかし、弥生はそんな事も氣づかずに時々子供に戻ったように無邪気に笑つている。

暫く歩いてからお互い別の方角になり、

「じゃあこいで。また会おうね。」と言つて弥生は別の方角へと歩きだした。

「うん。また。」と言つてしまつた後、僕は暫く悩んでから、弥生の方へと走つていった。

7

弥生は少し離れた場所に歩いていた為、すぐに追いつく事ができた。

「どうしたの?」少し驚いた顔をして僕を見る。

「ハアハア」「めん。驚かしちゃつた?」「少し走つただけなのに思つ

たよりも息があがっている。

「うん。突然走つてくるから。」

「そうだねビッククリするよね。」

僕は一度深呼吸をしてから呼吸を整えた。

「実は、メルアドでいいから教えて貰いたくて。駄目だよね・・・？」

弥生は少しだけ迷ったような素振りを見せた後に、

「うん。いいよ。」と黙つてメルアドと番号まで教えてくれた。

「ありがとう！」僕がとても嬉しくなり喜んでいる。

それを見ながら弥生はくすくすと笑つていた。

弥生と別れてから僕は自分の行動力に凄く驚いていた。

今までの僕にはあり得ない事だからだ。

自分から連絡先を聞いた事もそうだけど、最初に別れた後に弥生の所に行つたという事が一番驚いている。

僕が今まで生きてきたと言つてもそれ程長くはないが、しかし生まれて始めての事なのには変わりはない。

今にも心臓が破裂しそうなぐらい緊張していたわりには普通に聞

けていたと思つ。

僕は昂る気持ちを抑えながら家に帰つていった。

家に着いた後も弥生が頭の中から離れないでいる。

携帯の彼女のアドレスをみてはやめみてはやめの連續だ。

時々大きなため息もある。

僕は自分がおかしくなつてしまつて、いつのよつた気持になつた。

高校に通つている頃の事だ、一度だけ付き合つた子が居た。

高校2年の2月一つ年下の後輩だったあいみは、学校の下駄箱の前で僕にチョコを渡して好きと言つてきた。

あいみは学校の中ではちょっとした有名人で何処の誰かが人気投票みたいな事をしていく中で1位か2位を争つような女の子だ。

そんな彼女が告白をしてきた時には冗談で言つているのか、からかっているのかと始めは疑つてしまつた。

はつきつ言って僕は顔もとりわけかつこよくもなく身長だつて170そこそこの何処にでもいそうなごく普通な高校生だつた。

母子家庭だつた僕はバイトに明け暮れていて部活だつてやってい

た訳でもなくスポーツで目立っていたわけでもない。

そんな僕にあいみは好きだといつてきただ。

彼女と付き合った後、暫くしてから母親の死や引越しとかで色々あつた僕は、結局長くは続かず別れてしまったのだけど、あいみの事は好きだったと思つ。

だけどその頃の気持ちと今の気持ちは少し違つている様な気がした。

イタリアンレストランで梓に紹介され、弥生をみた瞬間僕の頭の上にある矢印が一気に彼女の方に向かって指したのが僕自身にも分かつてしまつた。

たぶん僕は彼女に一日惚れしたんだ・・・

そう気付くにはそれ程時間は掛からなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4511d/>

---

秋桜の花

2010年10月28日08時44分発行